



NEWS

No. 141
August 2011

(社) 日本工学アカデミー広報委員会

Office : 〒 108-0023 東京都港区芝浦 3-9-14
芝浦工業大学 7F

Tel : 03-5442-0481

Fax : 03-5442-0485

E-mail : academy@ej.or.jp

URL : http://www.eaj.or.jp/



第19回国際工学アカデミー連合大会に出席して

国際委員長 小泉 英明 / HIDEAKI KOIZUMI

国際工学アカデミー連合 (CAETS: International Council of Academies of Engineering and Technological Sciences, Inc.) は1978年に設立され、現在は26カ国の工学系アカデミーが参加しています。日本工学アカデミーは、第10番目にこの組織に加盟しました。西澤潤一会長の2007年には、第17回のCAETS大会(Convocation)が東京で開催され、日本の立場も向上したと伺っています。

今年6月27日から7月1日の間、第19回CAETS大会がメキシコで開催されました。大会は技術シンポジウムと運営会議(Council Meeting)から構成され、22カ国の工学系アカデミー代表が出席しました。今回の大会テーマは奇しくも「リスク低減のための工学的解析とマネジメント」ですが、もちろん東日本大震災の以前に決められていたテーマです。

東北地方を中心に襲った巨大地震と津波の被害は過去に例がないほど甚大で、東京電力の原子力発電所事故もまだ収束していません。小宮山宏会長の出席が困難なため、僭越ながら代理を務めて参りました。

現地では、最終日の運営会議の冒頭で、日本

から5分間のスピーチを行うようにと、技術シンポジウムの期間中に急遽要請されました。ここは清水の舞台から飛び降りるつもりで、前向きに要請をお受けしました。

東日本大震災の被災地に、迅速かつ実質的な支援の手を差し伸べて下さった各国へ、心から感謝の意を申し述べ、また、震災後の日本の現況をご報告しました。未曾有の災害の中で「工学の重要性」がさらに浮かびあがったこと、また、物質的な繁栄のみではなく「人々の安寧とよりよき生存」(Human-Security & Well-being)を目指すことが工学本来の使命であり、さらに新たな「人間志向の工学」(Human-oriented Engineering)は「人間能力向上」(Human Empowerment)に資する可能性があることに触れさせていただきました。運営会議の中では多くの発言の機会を頂戴することとなり、できる限り日本からの発信を心がけました。

一方、技術シンポジウムのテーマの一つは「原子力発電の安全性」でしたが、フィンランドの使用済み核燃料処理を含めた長年に亘る総合安全対策の地道な努力、そしてインドの積極的な姿勢が印象的でした。福島原発事故はまだ予断を許しませんが、各国の工学アカデミーの意見の大半は、総合的な見通しが不確かな代替エネルギーへの急展開は短絡的であり、冷静かつ合理的な判断が求められるというものでした。

徹底した議論の後には夜の部が準備されている日々があり、出席者全員、メキシコの民族バレーや、メキシコ作曲家の作品による演奏会に招かれました。欧米のオーケストラと一味違った温かい音色と、微妙な揺らぎを伴っ



Council Meeting (写真提供: 韓国工学アカデミー)

たりズム感、そして何よりも熱い情熱に多くを学びました。

最後に、東アジア工学アカデミー円卓会議を軸としたアジアの工学アカデミー連携の現況に



も触れたいと思います。中国の政治家は工学系出身の方が多く、党の全人的教育制度と相まって優れた人材を生んでいると言われます。また、最近では、工程院(CAE: Chinese Academy of Engineering)に国策として注力し、科学技術と産業政策のシンクタンクとして機能させる方向へと進んでいるように感じます。本年10月には釜山で中韓日を中心とした円卓会議が開催されますが、この三国の連携は極めて大切だと思います。

この5月に国際委員長を拝命したばかりの新米に、多大なご支援を下さいました事務局の方々、そして、路線を敷いておいて下さった岡田雅年前国際委員長をはじめとする諸先生に深く感謝申し上げます。



第10回日米先端工学(JAFOE)シンポジウム

常務理事 玖野 峰也 / MINEYA KUNO

東日本大震災の影響を受け、米国側の要望もあって、急遽開催地をつくば市から大阪市に変更して、2011年6月5日から8日まで予定通りの日時に開催できたのは、偏に運営委員をはじめ関係者の皆様のご支援の賜物である。

参加者は米国側が28名、日本側が30名で、主共催関係者(NAEのCharles M. Vest会長、EAJの小宮山宏会長、JSTの高松明本部長ほか)を含め総勢72名の出席となった。テーマは「Massive Data Management」、「Smart Grid」、「Bio-inspired Materials」、「Robotics」の4件であり、それぞれのテーマ毎に日米各2名の発表を受けて全員で討議を行うスタイルを4回繰り返した。準備の段階から当日の議論の進行まで、運営委員を中心とした参加者58名の協力で進める様は、Engineering DesignのTeam Behaviorをコンセプトとしており、NAEの取組みの一貫性を感じる事ができた。

さらには発表と討論の合間に、58名の参加者全員が自らの研究テーマについてポスター発表を行い、ソーシャルプログラム(浪速の川下り)と共にネットワーキング作りの場となった。

ディナースピーチとして、インターメタリッ



運営委員長(米国) : Katharine G. Frase氏(前列左)、
同(日本) : 金谷一朗氏(前列右)

クス社の佐川眞人社長に「The NdFeB Magnet - From Birth to 100,000 Ton/Year Giant」と題して講演いただいた。仮説を立てPDCAのサイクルを意識しつつ、発想の原点も顧みた経験談に参加者は酔いしれた。

今回は日本からの出席者30名全員に短いながらも、JAFOEの報告を綴っていただいた。二日半の熱気を感じていただければ幸いである。

安藤慎悟 (株)安川電機 同じロボティクス分野の参加者とはそれなりに議論ができて大変有意義でした。異分野の参加者とほとんど議論はできませんでしたが、ささやかな交流ができ、よい経験をさせて頂きました。関係者の皆様どうもありがとうございました。皆様の今後のご活躍を祈願致します。

石山政浩 (株)東芝 研究開発センター 自分の専門とは異なる最先端の議論に参加できるシンポジウムは自分としても初めての体験であり、非常に興味深く、また刺激になりました。また、北米の研究者とのつながりを得られたことは大変貴重でありました。

犬塚史章 東日本旅客鉄道(株) 私は招待討議者の立場で参加しました。シンポジウム全体を通し、最先端で活躍される方々の取り組みや問題意識に触れ、良い刺激を受けました。今回得られた経験や人脈など今後に生かしたいと思えます。有意義な機会を与えて頂きまして大変有難うございました。

緒明佑哉 慶應義塾大学工学部 異分野の交流ができかつ先端的な工学に関する話題に触れ、第一線でご活躍の若手研究者の方と交流を深めることで、視野を広める充実した時間を過ごさせて頂きました。参加させて頂き誠にありがとうございました。

大石岳史 東京大学 “Massive Data Management”では、シミュレーション、データマイニング、デジタルアーカイブ、クラウドなど幅広い分野からの発表があり、非常に有意義な情報交換の場となった。またポスターセッションも含めて活発な議論が行われ、この分野に対する関心の高さも実感できた。

岡本泰英 東京大学 米国の他分野の研究者とあのように長い時間交流することは今までの普通の研究生活の中では味わえない体験であり、そうした時間の中で率直な議論を交わす中で、研究者の目指すべき方向性、他の研究者の奇抜な着眼点などを学ぶことができ、非常に有意義な三日間でした。

金岡克弥 マンマシンシナジーエフェクタズ(株) 全体としては有意義であった。ただ、両国共、発表が技術面に若干偏っていたこと、他分野の聴衆に対する問題提起が少なかったこと、またそれに伴い、ディスカッションの内容が浅くなってしまったこと、が残念。少人数での議論の場が欲しかった。

金谷一郎 大阪大学大学院工学研究科 大震災の影響で開催そのものが危ぶまれた中、JAFOE 2011は素晴らしい運営委員、スピーカ、招待討議者に恵まれた。この若きエンジニア同士の交流が新たな日米関係の礎となると信じる。ご尽力頂いたEAJ、JST、NAEのメンバーに感謝する。

河内鶴代 トヨタ自動車(株) JAFOEに参加させて頂き誠にありがとうございました。日米の研究者達と共に過ごした三日間はとても新鮮で貴重な時間でした。発表が殆ど専門外の内容でしたが、異なる分野の考え方や世の中の動向を知ることができ、大変刺激になりました。

川崎 洋 鹿児島大学 スマートグリッドからデジタルアーカイブ、さらにロボティクスと広範に渡る、普段あまり接することのない異なる分野の若い研究者達と、3日間という長い時間を共有し、ディスカッションできたことは大変刺激となった。機会があれば次回も是非参加したい。

木内 舞 (財)電力中央研究所 日頃触れることが少ない分野の先端的研究から、実運用に近いシステム、日米の考え方や文化の違いまで、幅広く議論できる良い機会でした。議論が盛り上がりづらいという懸念があったかもしれませんが、広い分野から参加者が集まる重要性を実感しました。

北本朝展 国立情報学研究所 他分野の人にもわかるような発表がJAFOEにおける重要な経験だと思うが、事前勉強会後に発表内容を修正できたのがよかった。また食事やエクスカージョンでも交流を深められたが、米国のポスター発表者と研究内容を議論する時間が足りなかったのが残念だった。

齋藤 彰 大阪大学工学研究科 「生物模倣材料」分野の講演者として参加。事前の懸念(分野内で講演内容の重複、異分野間での相互理解の溝など)はある程度避けられた(後者は確証が無いが4月の事前討論は大きかった)。議論も日米で偏らず積極的に行われ、個人的に得るものが大きかった。

齊藤賢爾 慶應義塾大学 JAFOEは短い間でしたが異分野・異文化との交流が刺激的であり今後の研究活動に関する様々なヒントをもらえた気がします。そしてある意味、JAFOEの本番はこれからのでしょう。すでに協働のためのアイデアが幾つかあるので早速実行に移していきたいです。

坂根昌一 シスコシステムズ 自分のフォーカスしている分野とは異なる分野の方達と意見交換できたことは、全く異なる側面からの指摘や、研究を進める上でのヒントを得ることができたので、非常に有意義な機会だったと思えます。今後も機会があれば、この様な場に参加したいと思いました。

柴田俊和 住友電気工業(株) 普段の会社生活で味わえない、異文化、異分野エンジニアとの交流で、非常に刺激的でした。泊まり込み故に休憩、食事、トイレでまで容赦ない英会話が飛び交い必死でしたが、そういった会話にこそ本音が見え勉強になりました。楽しくて有意義、最高の3日間でした。

杉原知道 大阪大学 運営委員として参加。最大のミッションは、国内の優れた技術者・研究者の推薦であった。これに関しては自信をもって達成したと言える。公平にみて、技術の独創性は日本が米国に優っていたように思う。一方、平均的プレゼン力は米国側にイニシアティブがあったか。

関口勇地 (独)産業技術総合研究所バイオメディカル研究部門 JAFOE 2011では、私の専門分野とは全く異なる工学分野の先端的課題について広く議論が行われた。これほど広い異分野について集中的に議論する機会を持ったのは私にとっては初めての経験であり、大変刺激的なシンポジウムであった。

竹房あつ子 (独)産業技術総合研究所 異分野の日米の若手研究者が集う会議ということで不安もありましたが、各セッションをはじめ、ポスター、excursionと刺激のかつなごやかに交流することができました。このような機会を与えて下さった関係者の皆様に感謝いたします。

丹 康雄 北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科 本シンポジウムは通常の学会とは全く異なるカルチャーショックを与えてくれた。同じ専門分野で課題を共有している者が同国人同士よりも意見が一致する一方、専門知識の常識を超えた文化の違いなども感じさせられることがあった。

長坂善禎 (独)農業・食品産業技術総合研究機構中央農業総合研究センター なじみの薄いテーマもあったが、発表者はわかりやすく伝えていた。休憩や食事の時間にも日米の違いも含めて意見交換することができ、有意義であった。今回できた関係を維持し、今後の自分の仕事に役立てていきたい。

平井悠司 東北大学多元物質科学研究所 JAFOEに参加し、全くの異分野の研究者と交流を持つことができた。震災により、今課題となっているエネルギーや原子力の問題に対し、様々な方面から現状を打破しようとする考えを聞くことができ、自分の研究の方向性を確かめることができた。

平野晋吾 三菱マテリアル(株) 専門分野の議論のみならず、異分野を専門とする技術者との議論から、視野を広げ、専門領域と他領域との技術的な関係を学ぶことが出来ました。また、日米技術者との交流から新しいネットワークを築くことが出来たことは、この会議での最大の収穫でした。

藤井啓正 (株)NTTドコモ 先進技術研究所 普段馴染みのない分野の最新技術について米国及び日本の技術者から話を聞き、交流する機会が得られ、かつ自身の研究を客観的に見直す機会として、とても有意義な時間を過ごすことができた。今後も、引き続き本シンポジウムが開催されることを期待する。

細田奈麻絵 (独)物質・材料研究機構 全く異なる分野の人々と交流する機会を頂いたことは、視野を広げる貴重な体験となりました。視野が広がることで、改めて社会と自分の研究の接点を意識することができました。ここで得た交流の和を今後も大切にしていきたいと思えます。

松本吉央 (独)産業技術総合研究所 研究と産業化との間のギャップについては、米国のロボット研究者も日本と同様の大きな悩みを抱えていることがよく分かった。技術からスタートするのではなく、ユーザのニーズ分析に基づき研究開発を行うことの重要性を再認識する貴重な機会となった。

村田美穂 (株)富士通研究所クラウドコンピューティング研究センター 今回の参加は、異分野の方々との議論することで、自分の研究の位置づけや、分野に依存しないサイエンス全体の問題などを改めて考え直す良い機会となり、非常に有意義でした。

室崎喬之 北海道大学大学院先端生命科学研究院 生物模倣材料のセッションは他のセッションと異なり生物系の話が多かったが、逆に新鮮味を持って聞いてもらうことが出来たと思う。また異分野の方々とのディスカッションを通して研究の応用化に関し参考となる知見を得ることが出来た。

盛合志帆 ソニー (株) 異なる専門分野の相手と英語で相互理解を深め、信頼関係を築くことの難しさを痛感し、一回り成長しなくてはと感じました。参加メンバーとは「同窓会」やFacebookなどを通じて今後も関係を維持・発展できそうで期待しています。開催に御尽力下さった皆様に感謝いたします。

森本 淳 ATR脳情報研究所 現在注目を集めている工学分野について短期間で学ぶことができた。その一方で、他分野の参加者との交流は人的なものにとどまる傾向もあった。より隣接した工学分野で、共通の応用などの目的意識を持って臨む形式があってもおもしろいかもしれない。

大震災後の仙台、未だ異常な空気が生活を覆っていた3月、副会長就任の依頼を、東京のJSTの本部を介して、いわば事務的に受け取りました。私自身、法人化前の理事を務めたことはありますが、その後はEAJの運営には係わっておりませんでしたので、最近の動きはほとんどわからず、ただ戸惑っておりましたが、次に催促のメールを頂き、いつまでも返事を延ばすのは申し訳ないと思い、受託する旨メールをいたしました。

このような状態で意見を述べることは必ずしも適切ではないと思いますが、あえて希望を申し上げます。第一は、EAJの会員になることのステータス・シンボルは何か、あるいはいかにそれを高めるか、です。第二は、史上希に見る超巨大地震、津波と原発事故を経験して、工学系アカデミーとして、科学者、技術者の責任を

も踏まえた、未来に向けたメッセージを出すことです。とくに後者について言えば、言うに易く、行い難いことです。日本の科学者コミュニティはこのような面倒なテーマを一般に敬遠しがちですが、政府や事業者から独立した、科学的、技術的根拠に基づいた見解を、一般の市民や世界が待っていることは間違いありません。なお、失礼の段は、「浦島太郎」に免じてお許しのほどお願いいたします。

これからは諸先輩の足跡に敬意を表しつつ、会員の皆様とご一緒に仕事をする事になりましたので、改めてよろしくお願いいたします。



「九州支部設立について」

日本工学アカデミーは、工学に関する提言を社会に発信したり、地球規模の課題解決に取り組むなど、工学的立場から日本を先導するユニークな集団である。

日本工学アカデミーは、本部活動が中心で、地区活動としては、年数回の講演会・懇談会が開催されている。小宮山会長より九州地域の支部活性化と会員増強を目的に、支部設立を依頼された。九州地域には現在約25名の会員がいるが、現役の会員は約半数であり、地域活動は活発でない。私は、熊本大学長の谷口功先生と大分大学長の羽野忠先生に相談し、九州支部設立の準備をさせていただいた。本部事務局と連絡を取りながら、支部役員の組織化と支部規約を作り、九州地域の会員に支部発会の賛同と支部活動への支援をお願いし、初秋には支部設立を行いたい。支部設立発会式は、小宮山会長と本部役員にご出席いただき、講演や懇親会を予定している。

会員増強は継続的な組織強化と支部活動活性化に不可欠である。日本工学アカデミーの設立

主旨からすると、あまり会員資格の推薦基準を下げられないが、推薦ガイドラインに書かれているように若手会員掘り起こしが必要ではないだろうか。40～50才代の日本の工学分野を先導する若手研究者に加入を要請し、日本工学アカデミーの活動範囲の広さと深さを拡げる必要がある。会員候補者推薦の基準にある「顕著な貢献をした方」、「顕著な成果をあげた方」とか「顕著な功績のあった方」など過去形になっているが、工学の各専門領域を先導し、顕著な実績をあげ、現在第一線で活躍している若手研究者の加入は不可欠である。若手会員の年会費はシニア会員の半分程度で良いのではないだろうか。支部設立が、若手会員の増強に繋がり、日本工学アカデミーの設立主旨を保持しながら、組織の拡大と活動の顕著な活性化に繋がることを期待したい。



神山 新一 / SHINICHI KAMIYAMA

2002年会長に就任された西澤潤一先生から工学アカデミーの遠隔地地域での活動を活性化するために、九州地区の國武豊喜先生と君を副会長に推薦することにしたのでよろしくのご下命を受けた。とりあえず北海道・東北地区でのアカデミーの活動を推進するために、当該地区での問題をテーマとした作業部会を立ち上げ、各県持ち回りでの会議とあわせて地区活動の一環としての講演会・懇親会を開催することにした。その後、2006年9月の理事会で、企画委員会(委員長:川崎雅弘氏)から地区活動強化(小)委員会の設置をとの要望が提出され、その後種々検討の結果、「地区活動強化」作業部会(主査:神山新一)として発足することになり、引き続き副会長として全国的な観点からの地区活

動強化策を企画、推進する運びとなった。会員数ゼロ県をなくそうとの取組みも、まだ道半ばであり、心残りではあるが、東日本大震災の影響もあり、この度退任することになった。後任の方に更なる活動の活性化を期待するところである。大震災、そして原発事故と未曾有の大被害に直面しているわが国の復興に向けて、今こそ広範な工学分野の研究者・技術者の集まりである日本工学アカデミーの総力を結集して対処する時である。会員の皆様のご協力を節に望むものである。



飯塚 幸三 / KOZO IIZUKA

2007年5月に理事・副会長にご選任いただいてから4年間で瞬く間に過ぎ、本年5月をもって退任いたしました。就任早々、CAETS第17回総会東京会議を目前に急逝された柳田博明副会長・国際委員長の代わりを務めさせていただき、また、歴代会長のご指導の下でEAJのさまざまな国際活動に関わったことは得がたい経験でした。とくに上記東京会議の成果として、工学の世界でのEAJの存在感が高まり、この4年間にはそれ以前の中、韓、米、豪、瑞などのアカデミーに加えて、英、仏、独、チェコなどとの協力関係が確立しました。一方、同じ時期にEAJの財政状況が悪化し、リーマンショック、政権交代など社会環境の急変もあって、任期の後半は新政権対応および会員増強などの活動に

忙殺されました。残念ながらこれらの活動では十分な成果が得られておらず心残りですが、それ以上に東日本大震災とそれに伴う原発事故は工学者の社会的責任としてこれからの大きな課題であり、わが国の研究開発の仕組みの再点検と併せて今後のEAJの取り組みに期待したいと思います。終わりにりましたが、在任中の皆様からのご指導とご支援に厚くお礼申し上げますとともに、会員各位の一層のご活躍とEAJの発展を祈念いたします。



日本工学アカデミーの歴史は2007年に開催されたCAETS Convocationを境として、新たな章を開くことになったといえます。2008年に専務理事に就任した私は、アカデミー自身や諸情勢が大きく変化しつつある中で、会の活動を新しい軌道に乗せる舵をとる責務を負っていました。いま来し方を顧みると、多様化した国際活動、経産省からの受託事業、民主党政権への働きかけ、財政改善など、眼前に生じた個々の課題に対しては、不十分ながらも力を尽くしてきたと思います。しかし、私が最も自省しなければならないのは、アカデミーが大きな転換期にあることを見据えて、大局的視点にたった戦略思考のもとに行動し得なかったことでしょう。菲才の身に余ることとはいえ、その点においてあまりにも無為無策であったことに忸怩たる思いを禁じ得ません。

今後はそうした戦略的な会務執行を、組織で

方向づけしていくマネジメント体制が敷かれます。新しい酒を盛る新しい革囊を得たといえるでしょう。すでに幾つかの新機軸が始動しつつあるのは、私がなし得なかったことを実現するものとして、まことに心強い限りです。

3年間の専務理事在任中、2度にわたって健康を害し、多大のご迷惑をかけたことをお詫びするとともに、皆さまから温かいご指導、ご厚情を賜りましたことに心から御礼申し上げます。そして科学技術・工学が再び輝きを取り戻すために、我がアカデミーが貢献できることを心から願っています。



新入正会員のご紹介

(2011年5月入会者)

[第1分野]
いけだ まさお
池田 雅夫



大阪大学本部特任教授

1947年高知県生まれ。広島県育ち。1971年大阪大学大学院修士課程(通信工学)修了。1975年工学博士(大阪大学)。1973年神戸大学工学部助手。1990年同教授。1995年大阪大学工学部教授。2010年より現職。制御理論と応用の研究、大型プロジェクト支援に従事。

おおぞの しげお
大園 成夫



東京大学名誉教授

1940年福岡県生まれ。1966年東京大学大学院博士課程中退、同年同大学工学部助手。1983年同教授。2001年同定年退職、東京電機大学教授。学長補佐、未来科学部長、同研究科委員長。先端科学技術研究科委員長。専門は精密測定学。2010年藍綬褒章受章。

まつの けんいち
松野 建一



日本工業大学工業技術博物館長

1938年茨城県生まれ。1968年東京大学大学院博士課程修了(工学博士)。同年工業技術院機械試験所入所。生産技術の研究、大型プロジェクトの推進、所全体の管理運営に従事し退任。1997年から5年間NEDOプロジェクトを推進した後、2001年から現職。

[第2分野]

まつせ こうき
松瀬 貢規



明治大学理工学部教授

1943年中国青島生まれ、佐賀育ち。1971年3月明治大学大学院博士課程修了（工学博士）。同年同大学専任講師、1979年教授、1994年同大学大学院工学研究科委員長、1996年理工学部長。1998年中国清華大学客座教授、2004年同大学常勤理事。2009年第96代電気学会会長。専門はパワーエレクトロニクス。

[第3分野]

ちゅうばち りょうじ
中鉢 良治



ソニー（株）取締役代表執行役副会長

1947年宮城県生まれ。1977年東北大学大学院工学研究科博士課程修了、工学博士号取得。同年4月ソニー（株）入社。磁性材料などの研究開発に従事。1999年に執行役員就任。2005年取締役代表執行役社長を経て、2009年から現職。

[第4分野]

めぐみ さゆり
恵 小百合



江戸川大学教授

1950年埼玉県生まれ。1976年東京大学大学院工学修士、1979年同博士課程満期退学。(財)政策科学研究所を経て、1992年江戸川大学へ。専門は、建築環境工学／環境心理：都市環境評価。ナショナル・トラスト、荒川流域ネットワーク、自然環境復元協会、石西礁湖サンゴ礁基金運営。

[第8分野]

さかた とういち
坂田 東一



文部科学省顧問

1948年大阪市生まれ。1974年東京大学工学系研究科修士課程（機械工学）修了。同年科学技術庁入庁。1979年コーネル大学経営大学院修了。科学技術庁の核燃料課長、宇宙企画課長、計画課長等、文部科学省の研究開発局長、官房長、事務次官等を経て、2010年退官。同年同省顧問。

編集後記「広報委員会の活動」

広報委員会の活動では、「EAJ内部のコミュニケーション活性化」、「外部への情報発信」を柱に、EAJニュース、活動報告等の発行、紙上フォーラムの活性化ならびに他学協会との連携を推進していくこととしています。そしてホームページの充実をはかり、会員間の情報共有、会員の声、外部発信へとつなげていきたいと思っています。今回「会員の声」では「東日本大震災および福島第一原子力発電所事故について」をテーマに会員からの投稿を受けています。このようにタイムリーなディスカッションや発信が大切です。当委員会としても活用しやすい情報発信および情報共有の場の提供に取り組んでいきたいと思っています。会員諸氏の積極的な投稿、ホームページの活用をお待ちしています。

(田中秀雄)



社団法人
日本工学アカデミー広報委員会

